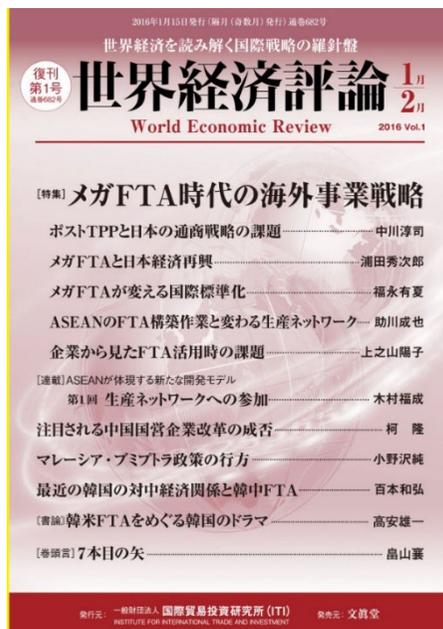


本論文は

世界経済評論 2016年 1/2月号

(2016年1月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

韓米FTAをめぐる 韓国のドラマ

大東文化大学教授 高安 雄一



[著者] 김현중 (Kim Hyeonjong)

[書名] 『김현중, 한미 FTA 를 말한다』

(金鉉宗, 韓米 FTA を語る)

“Kim HJ Speaking of the Korea-US FTA”

(韓国語版)

[発行] 2010 年

本書は、韓米 FTA 交渉時の通商交渉本部長としてアメリカ通商代表と渡り合ったキムヒョンジョンが、韓米 FTA の署名に至るまでの過程を中心に記した回顧録である。韓米 FTA 交渉の舞台裏はマスコミ報道などから断片的にしか知る術がなかった。本書では、決裂の危機を乗り越えて、アメリカの貿易促進権限失効から逆算したデッドラインぎりぎりまで交渉がなされた過程が生々しく紹介されている。

著者は、高校時代よりアメリカで教育を受けコロンビア大学で法学博士を取得した。ニューヨーク州の弁護士資格を得た後、アメリカの法律事務所勤務し、WTO の法律局で副局長級の職も務めた。2003 年、盧武鉉大統領に引き抜かれ、次官補級の通商交渉調整官に就き、2004 年には長官級の通商交渉本部長の職に就いた。

陣頭指揮を執った著者が明らかにした、韓国とアメリカで繰り広げられた交渉の内幕は臨場感にあふれている。交渉妥結に至るまでのドラマの中でも、2007 年 3 月 26 日から 4 月 2 日まで行われた最終交渉は最大の山場である。妥結のためには農水産品、自動車、繊維、通信など多くの分野で主張の隔たりを解消する必要があった。膠着が続き、著者はアメリカ代表団を率いるパーティア通商副代表に「荷物をまとめてワシントンに帰ってくれ」と言い放った。当初の交渉最終日であった 30 日には皆が交渉は決裂したと考えた。交渉は 31 日に入っても続けられ、韓国側の牛肉関税撤廃までの猶予期間が、10 年から 15 年にまで伸ばされた。31 日には、アメリカ側の乗用車関税撤廃の時期が、3000cc 以下については即時撤廃となった。4 月 2 日、牛肉のセーフガード量も決着し、同日正午の 2 分前に交渉は合意に至った。

本書に記されている最終交渉の様態をかいまんで紹介したが、韓国とアメリカで繰り広げられた交渉の内幕は、交渉責任者の証言だけ

に臨場感にあふれ、事前協議、公式協議、妥結以降の追加協議についても読者を惹きつける内容である。

FTA 交渉については、国と国のやり取りに注目が集まりがちであるが、国内で繰り広げられるドラマも見逃せない。国内における交渉開始の意思決定は FTA 交渉の大前提であり、政府の関係部門と利害調整をしなければ相手国と具体的な交渉に入れない。本書では、大統領が韓米 FTA 交渉開始を意思決定するまでのやり取り、そして政府関係部門とのやり取りも紹介されている。

韓米 FTA にまつわる最大の謎の一つは、盧武鉉大統領がアメリカとの FTA 交渉を決断したことであろう。大統領は、元々は反米主義で知られており、政権の支持母体である労働組合は自由貿易に反対している。農業を始めとしてアメリカからの輸入が増え、深刻な打撃が予想される産業からの激しい反発も覚悟しなければならない。2005 年 9 月、大統領が韓米 FTA 交渉開始を決断したが、本書からは、著者による再三に渡る説明が決断を促したことが読み取れる。

著者は、アメリカとの FTA は韓国に最大の利益を与える一方、日本との FTA は損失を与えると考えていた。この持論にもとづき、著者は FTA の相手国を、既定路線であった日本からアメリカに変えるべく行動した。具体的にはアメリカを振り向かせるべく布石を打ち、その甲斐あって 2004 年 11 月、アメリカのゼーリック通商代表が FTA 交渉を持ちかけてきた。もちろん、アメリカを振り向かせても、大統領が興味を示さなければ話にならないため、通商交渉調整官に就任して以降、再三に渡り韓米 FTA の重要性を説明してきた。

著者はアメリカとの事前協議の後、2005 年 9 月、大統領がメキシコに訪問した際に、遅くとも 2006 年初めには交渉に入る必要があることを

説明した。大統領はその場で最終的な決断を下した。大統領は、植民地戦争のような経済戦争が市場で起っており、韓国が経済的な植民地ではなく先進国として生き残るため、韓米 FTA が重要であることを強調した。そして決断後の夕食会で大統領は、韓米 FTA 交渉は、著者の 1 年以上にわたる説明により一人で決断することができたと語った。

著者は、日本は東アジアの覇権を狙っており、韓国が準備をしないで既定路線の日本との FTA を結べば、韓国が経済的な従属関係に陥ることを本気で懸念していた。大統領はこの考えを何度もインプットされた。前政権が決めた FTA をそのまま踏襲すれば、李氏朝鮮末期に對外政策を誤って国を滅ぼした大院君のような評価を、自分が受けることもあり得る。それよりも、韓米 FTA を決断した大統領として歴史に名を刻みたいと考えたのかもしれない。いずれにせよ、経済面で目立った業績がなかった大統領にとって韓米 FTA は、短期的な批判は受けても、それを上回る魅力があったことは間違いない。

本書は、政府の関係部門とのやり取りも紹介しているが、韓国における大統領の強権を改めて実感する内容である。2005 年 8 月に開催された FTA 関係閣僚会議の場では、農林部長官、環境部長官から異論が出たが、大統領自ら問答無用と取り合わなかった。さらに国会議員は出番がなく、反 FTA デモも頻発したが交渉には影響を与えなかった。

結局のところ韓米 FTA をめぐるドラマについては、国と国とのやり取りは当然として、国内で繰り広げられたやり取りも、著者が主役であったようである。歴史に if はないが、著者が日韓 FTA に価値を見出していたら、盧武鉉大統領の業績は日韓 FTA 締結であったかもしれない。

(たかやす ゆういち)